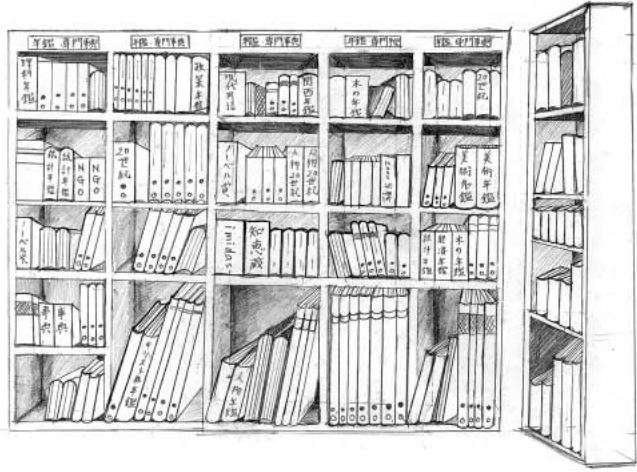


ライブラリー・スケッチ

「参考図書コーナー」



図書館の入口に入って、検索台の後ろに「参考図書コーナー」があります。参考図書は特定の事項について調べたりするときによく使われる図書で、百科事典をはじめ目録、事典、年鑑、統計書などがあります。解らない事項があれば、一度このコーナーで探されてはいかがでしょうか。

絵・文とも 中山 華(4A8)

ドイツ文学わき道散歩(2)

もしも恋人が生身の人間ではなかったら?前回お話ししたウンディーネの正体は水の精であったが、今回ご紹介するのは皇帝の妃となった妖精の話。

ホーフマンスタール作「影のない女」の主人公は、姿形は全く人間そのものであるにも拘わらず、彼女には人間と大きく異なる所が2つあった。子どもを産む能力がないこと、そして、影がないこと。彼女は妖精のもつ永遠の若さや美しさと引き替えに、人間の女性からこれらを手に入れようとする。この物語のポイントは「影がない」というところにある。若さや美しさを犠牲にしてまで求めるものがなぜ影なのか。あったところで、さして役にも立たない影は、失っても何ら問題ないと思われがちであるが、本当にそうであろうか。影のない人物は果たして“人間”と呼ばれうるのか。読み易い作品だが、物語中の影の役割には哲学の国ドイツらしさを感じる。

同じく、影がない=実体がないというテーマを持つ作品がもう一つ。ホーフマンスタールに先駆けること約100年、ロマン主義作家のシャミツソーは「ペーターシュレミールの不思議な物語」(邦題は他に「影をなくした男」「影を売った男」など)で悪魔に影を売った男の数奇な運命を描いている。悪魔に売るものといえば、ゲーテの「ファウスト」然り、魂だと相場は決まっているのだが、敢えて影を買った悪魔に注目していただきたい。悪魔の目的は何だったのか。それは読んでのお楽しみである。ところでドイツ文学ではすっかりお馴染みの悪魔だが、悪魔も顔負けの非情で冷酷な“悪魔のような”女が出てくる物語がある。けれどもこれは別のお話、またの機会にお話ししよう。

1999年度 ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり